埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター
MAIBUN NIIGATA
2022 Aug.
第118号

発掘調査整理遺跡紹介

村上市**上野遺跡**　令和４年度の発掘調査・整理遺跡

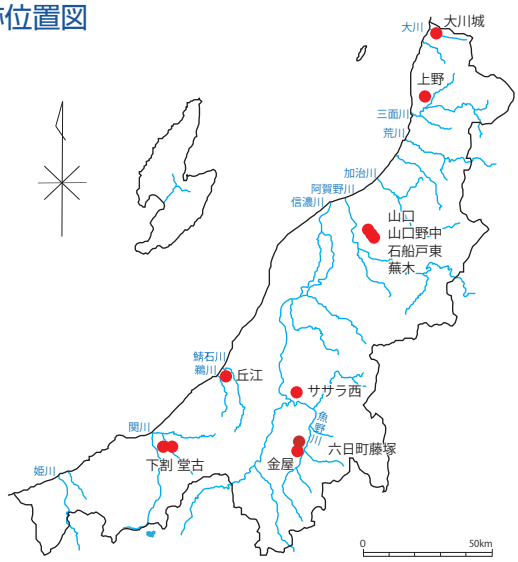
企画展案内　**須恵器円面硯**　**情報発信のSNS**　**歴史の道紹介**

令和４年度 企画展１
地味にすごい！下越の縄文時代

令和４年度 本発掘調査遺跡・整理遺跡の紹介

本発掘調査は村上市上野遺跡、阿賀野市石船戸東遺跡・蕪木遺跡・山口野中遺跡、柏崎市丘江遺跡、南魚沼市金屋遺跡・六日町藤塚遺跡、上越市下割遺跡の８遺跡、整理作業は村上市大川城跡・上野遺跡、阿賀野市山口遺跡ほか４遺跡、南魚沼市金屋遺跡、長岡市ササラ西遺跡、上越市堂古遺跡の10遺跡を実施しています。

遺跡位置図



上野遺跡（村上市猿沢・檜原）

約4,000年前の縄文時代後期前葉の遺跡です。様々な建物の柱穴が重なりながら多数見つかり、継続して暮らしていた様子が分かります。

石船戸東遺跡（阿賀野市百津）

中世を中心とする集落の調査を行っています。以前に大型丸木舟を再利用した井戸が見つかっており、新たな成果が期待されます。

丘江遺跡（柏崎市田塚・茨目）

中世の集落と水田、弥生時代の流路を調査します。中世の集落では区画溝や土坑が検出されています。

六日町藤塚遺跡（南魚沼市余川）

古墳時代後期と奈良時代の集落跡で、奈良時代の建物の柱穴が多く見つかっています。遺跡からは坂戸城跡がある坂戸山が良く見えます。

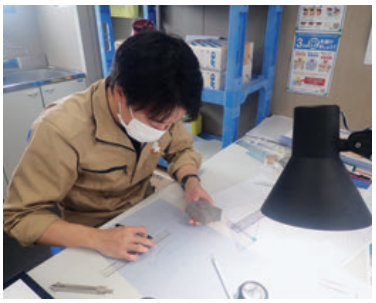
下割遺跡（上越市米岡・北田中）

高田平野の沖積地に立地します。中世、古代、古墳時代前期、縄文時代後期の４層の遺跡が重なっており、現在、古代の遺構を調査しています。

金屋遺跡（南魚沼市余川）

令和２・３年度の発掘調査で平安時代（９・10世紀）の掘立柱建物・竪穴建物や杭列などが見つかっています。写真は須恵器甕の接合の様子です。

ササラ西遺跡（長岡市川口中山）



令和３年度の発掘調査で中世から近世の水田、縄文時代の流路などが検出されました。報告書刊行に向けて遺構や遺物の整理作業を行っています。

2022年度
発掘調査
遺跡の紹介

上野遺跡Ⅵ
－縄文時代後期の大集落－

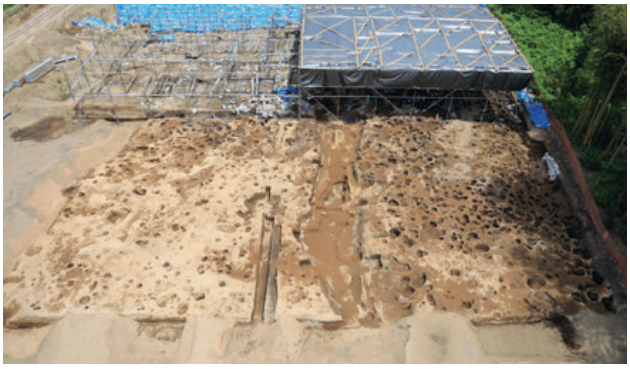
所在地：村上市猿沢・檜原地内

上野遺跡は縄文時代後期前葉（約4,000年前）が中心の集落遺跡で、三面川の支流である高根川右岸の丘陵裾部に立地します。国道７号朝日温海道路の建設に伴う発掘調査で、今年度が６回目の調査となります。遺物が今までに収納箱（内寸54×34×10cm）で3,000箱以上も出土し、新潟県北部を代表する集落の一つと考えられます。

遺跡は、居住域や廃棄場のある集落部と、南側の低地に堆積した砂礫部とに大きく分けることができます。集落部の遺物包含層は４層（４群）に分けることができ、上からⅢa～Ⅲd層としました。Ⅲb層の頃の遺構・遺物が最も多く、この遺跡の中心の時期と思われます。

昨年度から居住域の調査に本格的に着手し、今年度も同様に多数の遺構・遺物が見つかっています。遺構は建物、石囲炉・焼土（地床炉含む）、土坑、ピット（小穴）、埋設土器、集石・配石・立石、溝、自然流路、焼人骨集積土坑などがあります。建物はその構造から竪穴建物、平地建物、敷石建物、掘立柱建物（長方形柱穴列）に大きく分類できます。平地建物の柱の配列は、竪穴建物とほぼ共通するものと考えられ、建物の床面が地面に掘り込まれているかどうかで判断しました。現段階では平地建物が主体と考えています。柱の配列も多様で、炉を中心に一重に巡るもの（主柱または壁柱）、二重に巡るもの（主柱と壁柱）、柄鏡形になるものなどがあり、溝が伴うものもあります。建物範囲が複数重なっていることから、個々の時期差（建て替え含む）について今後整理・検討が必要です。上野遺跡では柱痕内やその上部から礫が複数見つかる例が多くあります。目的は不明ですが、意図的に入れたものと思われます。また、平地建物と掘立柱建物が一緒に見つかる遺跡は多いのですが、この遺跡では大型掘立柱建物が平地建物よりも古い時期に建てられていたことがわかっています。

下の写真は最近撮影した調査状況です。今後も新たな発見が期待されます。　（石川智紀）


調査区南側の完掘（南から）

溝を伴う平地建物（西から）

隣接する炉の調査風景

完形の磨製石斧が出土した柱穴（北から）

埋文
インフォ
メーション

令和４年度 企画展１
地味にすごい！下越の縄文時代

下越地域６館共同企画展

新潟の縄文時代といえば信濃川上中流域（中越）の火焔型土器、糸魚川市（上越）のヒスイが全国的に有名です。一方、下越にも魅力的な縄文時代の遺跡が多数ありますが、意外とそのすごさが知られていません。本展はこれまで新潟県・新潟市・村上市・阿賀野市・胎内市・阿賀町が発掘した遺跡出土品を展示し、個性豊かな下越の縄文時代に迫るこの企画展は、６つの会場で同時開催しています。

第１会場である当センターでは、阿賀野川流域の遺跡である阿賀野市萩野遺跡（中期前葉）、阿賀町北野遺跡（中期中葉～後期初頭）、阿賀野市山口野中遺跡（晩期後葉）を展示しています。これらの遺跡では、中期の前葉の一時期には北陸色が強くなり（写真１）、中期後半には東北南部（大木式）、中期末から後期最初頭には関東系の土器文様も認められます。後期初頭には新潟県域に特徴的な三十稲場式（写真２）など、各地の土器文様が見られます。これは人の交流が活発であったことの証拠でもあります。

また、阿賀町北野遺跡では、福島県の沼沢火山の火山灰を含む泥流が、大木６式期（縄文前期末）の集落を覆い、その災害収束後にまた縄文人が住み始め中期に大集落をつくりました。火山灰の層の上と下の出土品を比較することで、土器様式の変化のようすなどがよくわかります。

また、新発田市青田遺跡も展示しています。紫雲寺潟があった範囲で縄文時代の終わり頃に築かれた青田遺跡からは、台地の上の遺跡では腐ってなくなってしまう有機質遺物が数多く見つかりました。建物の柱材が残り、特徴的な掘立柱建物が数多く確認できました。また、数多くの漆製品（写真３）や木製品（写真４）など生々しい道具・生活痕跡が確認できたことが最大の特徴です。

他にも多く展示しています。ぜひ会場へ足をお運び下さい。（上田悟司）

会　場：第１会場 新潟県埋蔵文化財センター
期　日：令和４年９月25日（日）まで
観覧料：無料
他会場：
第２会場：新潟市文化財センター（新潟市）
第３会場：縄文の里・朝日（村上市）
第４会場：阿賀野市歴史民俗資料館（阿賀野市）
第５会場：胎内市美術館（胎内市）
※会期途中から黒川郷土文化伝習館
第６会場：阿賀町郷土資料館（阿賀町）

写真１　中期前葉の土器
（阿賀野市萩野遺跡）

写真２　後期初頭の土器
（阿賀町北野遺跡）

写真３　赤漆塗り糸玉
（新発田市青田遺跡）

写真４　飾把手付木製品（部分）
（新発田市青田遺跡）

企画展１チラシ
（６会場で同時開催）

埋文
コラム

須恵器円面硯

古来中国では文字を記す最も重要な文房具として筆・墨・紙・硯を文房四宝と呼び、これらは大切に扱われてきました。

硯は墨を磨り、墨汁を溜め、筆先を整える道具です。墨を磨り筆先を整える高い所を陸、墨汁を溜める低い所を海と呼びます。現在使われている硯のほとんどは石製で、形は長方形のものが多いのではないでしょうか。

奈良時代から平安時代初めには陶製（須恵器製）で上から見た形が円く、脚のついた硯が流行しました。これを円面硯と呼びます。円面硯は装飾性に富んだものが多くみられ、硯の材質に須恵器が選ばれた理由は、墨を磨る十分な硬さがあり、装飾が容易だったからと考えられます。

写真は1997年（平成９年）に上信越自動車道建設に伴い発掘調査を行った上越市大字滝寺に所在する滝寺11号窯跡から出土した奈良時代終わりから平安時代はじめの須恵器円面硯です。上面の直径は19.0cm、脚部下端の直径は17.0cm、高さは10.3cmです。

上面中央の高いところが墨を磨り筆先を整える陸、その周りの低いところが墨汁を溜める海になります。海には降灰がみられますが、陸には降灰がみられず、窯での焼成時に杯類を伏せるなどして灰が被らないよう工夫がされたようです。

円面硯の脚部は「ハ」字状に末広がりになる例がほとんどですが、この円面硯の脚部は弓なりになっており、上面の直径よりも脚部下端の直径が小さく、特徴的な形をしています。

また脚部には多くの装飾が見られます。装飾は３単位で、上部が凸状となる透かしが３か所にあり、このうち２つは下部が山形になります。透かしの間には透かしと同じ形が線描きされています。

脚の上位には、寺院の軒を支える組み物（斗栱）を思わせるような方形の耳が６か所に貼付され、耳の間には竹管を押し付けた円形刺突文が３～４か所施されています。

台脚下位には沈線で目と羽が表現された水鳥が貼付され、もう２か所貼付の痕跡があります。

奈良・平安時代の硯は、多くの文書が作成された役所の跡や、僧が写経などの修行を行った寺院跡から出土することが多いようです。現在の上越市は、奈良・平安時代は頸城郡の一部で、頸城郡には郡の役所（郡衙）のほか、越後国の役所（国衙）や国分寺が所在しました。

写真の硯は、須恵器窯の中から見つかっています。破損などの理由により、窯の中に放置されたものと考えられ、実際に使われることはありませんでした。役所の官吏（役人）や国分寺の僧が特別に発注したものだったのでしょうか。

写真の硯は、新潟県埋蔵文化財センター展示室でご覧いただくことができます。　（春日真実）

須恵器円面硯（上面直径19.0cm 高さ10.3cm）上越市滝寺11号窯出土

埋文
コラム

まいぶん！これが最前線！　Vol.2

縄文の里・朝日、Twitter始めたってよ
～文化財と人をつなげる一助としてのSNS～

縄文の里・朝日（以下、当館）においても、村上市、新潟県、日本全国の人々に向けて、埋蔵文化財をはじめとする文化財の調査・研究を活用するという目的があります。展示には、調査・研究が反映され、一般の方々へ研究成果を還元するということに意義を見出しています。

現在、少子化による人口減に伴い地方自治体の縮小から各地の資料館は閉鎖といった問題に直面しています。現在、生涯学習、教育といった役割だけでなく、文化財を観光資源としても活用する方向にシフトしています。しかし、当館でも国指定重要文化財を有しているのですが、文化財に対する一般の方々の認識は、「難解で楽しくない、自分には関係ない場所」になっています。

文化財に携わる人々と一般の方々には、文化財に対する考えに深い溝ができています。この溝を埋める手段はないのでしょうか。

両者の溝を埋める可能性は、SNSでの情報発信がそのひとつであると考えます。

当館でも、以前よりホームページ、Facebookを利用していましたが、2018年よりTwitterにて情報発信を行ってきました。

文字制限のあるTwitterでは、企画展やイベント情報には向かないので、当館に豊富にある出土品の写真とその特徴の紹介や「縄文あるある」という縄文時代の情報を一言にまとめた文章を発信しています。

これにより、実物が展示してある場所として来館者数増加につながればという考えでした。

第１図　バズったツイート

Twitterの文章には一工夫しました。文化財の全てを伝えることは140字の制限では無理です。

そのため、ひとつのメッセージのみ伝えることに専念しています。また、Twitter構文といった独特の言い回しを利用して説明を行っています。

ここ最近で一番反響のあったツイート（第１図）は「土器って、お湯が沸かせるんだよ。すごくない?」でした。Bot機能により何度か投稿されているツイートだったので、正直、戸惑うところもありましたが、最初に考えた「縄文あるある」であったので、みなさんに届きやすいものであったことに安心もしました。

また、2021年度よりTwitterと連携するnote（第２図）というSNSを活用し、当館の展示品に関する記事や企画展示図録を作成、販売しています。これまで印刷費や在庫の問題から、当館の展示図録・企画展図録などは作成が難しい状況でしたが、新たな方法で課題が解決できました。

今後、文化財から得られる知見を素早く深く、一般の方に届けることが求められるようになります。SNSには、発信側と受け手の双方向性があり、実物のもつ魅力を引き立てることができます。

博物館等が持つ文化財の情報を新しい形で、一般の方々に届けることを始めましょう。

（縄文の里・朝日　野田豊文）

第２図　noteとの連携

埋文
コラム

歴史の道紹介

清水越（越後と上野国境）

新潟県は平成元（1989）年から９年まで昔の街道と沿道の文化財を調査して12冊にまとめました。歴史の道は平地では新道に替わり、山間部の多くの道跡は草木に覆われていました。『新潟県歴史の道調査報告書第三集 松之山街道』［新潟県教育委員会 平成４年］からその一部をご紹介します。

清水越　南魚沼市清水から上越国境の山を越え群馬県みなかみ町をつなぐ峠路を呼びます。上杉謙信が関東出兵に使った軍道とも言われ、春日山城（頸城郡）から魚沼郡を経て関東を結ぶ最短路です。塩沢から魚野川支流登川を遡った清水は、越後国最後の集落で近くには直路城（清水城）が築かれ関東口に備えていました。清水には上杉家の会津移封で坂戸城主になった堀直竒が越後一揆の際、逃亡する農民を取り締まる口留番所を置きました。代々の関守である阿部家には、上越国境の絵図（写真）や清水村絵図、古文書類や刺股・槍などの番所道具が保管されています。

清水から街道は山岳地帯に入ると、時代や通行季節による道が幾筋もあったようで、謙信尾根（十五里尾根）や冬路ノ沢などの名が残ります。今回は阿部家絵図の「湯之ひそ越」の道を辿ります。現登山道から分かれ丸ノ沢を渡ると程なく建て場跡（荷継ぎ休憩小屋）がみえ、囲炉裏や明治十七年の牛頭大神の碑があります。古道の向かいには荷休めの腰丈の石積も残ります。大源太山と七ッ小屋山の間のオオバタケと呼ぶ緩斜面の樹林を抜け標高1,480mの稜線に達し、稜線を南下し蓬峠で上野側の斜面を下り湯檜曽に至ります。

この清水越は厳冬期には通行困難でもあり、三国峠の利用も増え寛文年間には通行量も減少し、諸品の運搬が主となったようです。　（田海義正）

左上：阿部家所蔵絵図　右上：丸ノ沢ルートの碑
左下：丸ノ沢から望む湯之ひそ越　右下：清水峠

県内の遺跡・遺物116

令和４（2022）年３月25日　新潟県指定文化財

有形文化財（考古資料）　延命寺遺跡出土品（457点）

所在地：新潟県埋蔵文化財センター
所有者：新潟県

延命寺遺跡は上越市下野田に所在し、高田平野のほぼ中央、飯田川左岸の沖積地にあります。平成18・19・23年（2006・2007・2011）に調査が行われ、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の遺跡であることがわかりました。今回、新潟県指定となったのは飛鳥時代・奈良時代の出土品で、土器のほかに耳環、農具、紡績具、木簡、刀子、須恵器を転用した硯、帯金具、木製祭祀具、琴柱、銅製の鈴などがあります。

耳環は古墳の副葬品にも見られる装身具で、この遺跡に一定の階層の人物がいたことを示しています。出土した土器は、その形の特徴などから、東北地方南部や近江地方の影響を受けているものも確認できます。

奈良時代の出土品では特に木簡、木製祭祀具、帯金具が注目されます。土地の売買が記載された売券木簡は、土地の売買という頸城郡の業務に関わる人物がこの遺跡にいたことを示しています。また、文書による行政に必要な暦を書き写した木簡も出土しました。木簡のほか、刀子や須恵器を転用した硯、木簡を削った屑も出土し、文字を書く行為や文書による行政が日常的に行われていたことがわかります。出土した木製祭祀具は斎串・人形・馬形・舟形で、いずれも人の身に着いた穢れを取り除く律令的祭祀で使われるものです。帯金具は銅の地金に黒漆を塗った烏油腰帯と呼ばれているもので、主に役人がベルトにつけて使用しました。また、紡績具や琴柱は農業とともに行われた多様な活動を物語ります。

このように延命寺遺跡の出土品からは、飛鳥時代には他地域と交流を持ち、一定の階層の人物が関与して集落が営まれていたことがうかがえます。その後、奈良時代になると、農業経営を行う一方、律令的祭祀を行い、頸城郡の業務の一端を担った役人の姿が浮かび上がってきます。律令制の施行にともない、当時の政府は地域の有力者を役人として採用し、地方統治を進めていきます。延命寺遺跡の出土品からは、越後国において、その様子を具体的にうかがうことができます。

（新潟県文化課埋蔵文化財係　山崎忠良）

飛鳥時代の土器

奈良時代の木製祭祀具（左）と帯金具（右）

埋文にいがた 第118号　令和４年８月５日発行
発行　新潟県埋蔵文化財センター　Niigata Prefecture Archaeological Research Center
指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地１　TEL：(0250)25-3981　FAX：(0250)25-3986
E-mail：niigata@maibun.net　URL：https://www.maibun.net/
『埋文にいがた』のバックナンバーは（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 HP でご覧いただけます。
上の URL からご確認ください。